

資料

水俣病多発地域における漁民の聞き取りによせて
「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」解題

熊本学園大学大学院
社会福祉学研究科福祉環境学専攻修士課程 井上 ゆかり

1. 本記録作成の経緯

水俣病事件研究において、漁村における被害の全体像を捉えるには、漁村の集団的特徴ならびに生業である漁業の特殊性を明らかにする必要がある、それには不知火海沿岸漁民の「語り」を丁寧に採録していくことが不可欠である。単に、漁民が魚を多食し水俣病被害が大きかったために語りを聞く必要があるのではない。水俣病の被害像をみる場合、まず社会集団としての漁村を把握しておく必要がある。さまざまに存在する漁村が、いかなる集団的特徴をもつのかを漁業の特殊性を理解することで、水俣病被害を受け止める意識、ひいては被害像を掴むことができるのではないかと考える。

ここでいう漁業の特殊性とは、漁撈形態（網元網子関係、漁業組織の内容）などの漁家の構造、漁業のあり方（漁法とその変遷、漁場、船のトン数など）、漁業の変化（副業の開始時期、その内容）である。

漁村社会が、地勢的条件のみならず漁業の特殊性によって封鎖的な性質をもたらすことで漁村における集団的特徴となるのではないかと考える。この集団的特徴は、漁民たちの漁業との結びつきかた、その程度が地域社会との関係を決定づけ、それぞれの漁村における特徴となるのである。

この聞き書はまず、筆者が修士論文¹⁾にかかる調査の過程で、芦北町大字女島^{めしま}沖集落^{きょうどまり}京泊で漁業を営んできた78歳になる松崎忠男氏から、自宅において2008年7月5日、7月21日、9月4日、11月14日、12月23日の5回にわたって採録したものである。聞き取りに際しては、次の3点が明確になるよう心掛けた。

1 つには、不知火海漁業を概観した上で、明治期から1967（昭和42）年頃までの松崎氏が暮らす沖集落における漁業の変遷を追い、戦後、地曳網漁から巾着網漁へと移行する過程でどのような基盤があったのか、つまり漁業の特殊性を捉えようとした。

2 つ目には、戦後に高揚期を迎えた巾着網における漁業組織である「統体制」が漁民たち

1) 井上ゆかり2008年度修士論文「不知火海漁業と水俣病に関する研究序説～女島沖集落における『統』体制の生成と崩壊から～」

の共同意識をどのように形成し、また崩壊していったのかの具体的状況を追い、漁村の集団的特徴を明確にしようと試みた。

3つ目に、水俣病来襲²⁾が、沖集落における漁民の意識や行動にどのような影響をもたらしたかである。例えば、1959（昭和34）年の不知火海漁民騒動に対する沖集落の漁民の反応である。

これらを念頭に置いて、明治期から1967（昭和42）年頃までの沖集落における漁業の変遷を中心に聞き取りをおこなった。

調査方法としては、あらかじめ、インタビュー設計に基づき大まかな質問項目を準備していたものの、松崎氏の語りの流れを壊さないよう配慮し聞き取った。この5回の対談をICレコーダーにて採録した。この記録を阿南満昭³⁾氏が重複を削り、松崎氏の人生の経過にそう形で、沖集落における漁業の変遷、特に小崎弥三網における「統体制」の高揚期から衰退期である1949（昭和24）年～1962（昭和37）年までを中心に編集した。これを本人に読んでもらい、若干の修正補足を加えた上で、了承を得たのが「松崎聞き書」である。

内容は、「少年期まで」「オヤジ還る」「巾着網の登場」「阿久根沖」「オヤジ倒れる」「網のいろいろ」「不知火海の漁」「イリコ製造」「奇病のはじまり」「認定申請」「川本輝夫さんのこと」「女島の気質」「患者運動」の13項から構成されている。戦後、巾着網が高揚期を迎え、漁業衰退する状況のなか、水俣病の来襲があり、その後の沖集落の人々の意識やどう行動したのかが分かるよう編集してある。

タイトルは、阿南氏が名づけた「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」であるが、筆者が修士論文で便宜上「松崎聞き書」と名付け使用した。しかしながら、この聞き書の性質上、「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」が妥当であると考え本資料のタイトルとした。

文中には「地曳網」「八田網」「巾着網」など漁法の名称が頻出する。そのため聞き取り時には、自身であらかじめ作成した各種漁法の表を手元におき松崎氏に確認をとりながら作成した表を今回、参考までに巻末に添付した（表1、2、3参照）。また、「語り」がそのままのかたちであるがゆえに、わかりにくいであろう言葉や、文中そのままでは意味が分からないと予測できるところは筆者が（ ）で書き加えた。

2. 松崎忠男氏について

松崎忠男氏は1930（昭和5）年3月25日、沖集落に生まれ、この地で育ち78歳になる現在

2) 女島沖集落において1959（昭和34）年に網元の1人緒方福松氏が急性劇症型水俣病で発症した時点をもって、「水俣病来襲」と呼ぶことにする。というのも、この時点以前は、水俣病は水俣市での出来事であり、この集落にとっては「他所ごと」と思われていたのである。人望の厚かったこの網元の発症が、身体的被害にとどまらず漁業被害など社会的側面からも女島地区における水俣病被害の始点として地域住民に認識されているからである。

3) 阿南満昭：現在、熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員。

まで漁業を営んでこられた。

この集落には、戦後にはじまった巾着網漁の網（統）が5統あった。この5人の内の1人である小崎弥三氏のもとで網子として支え、昭和30年代からの漁業不振、網元の水俣病発症によって「統体制」が崩壊していく中においても、最後まで支えつづけた主要な網子の1人である。この「統体制」については後に述べる。

氏は、1973（昭和48）年に水俣病認定された。その後、1984（昭和59）年～1996（平成8）年までの12年間、沖集落の住民の意向を行政に橋渡しをするという役割である行政区長をつとめた。氏は、月に1回必ず一軒一軒の家々を訪問し、地域住民の生活に困ったことはないかなど聞いてまわっていたという。旧湯浦町において行政区長を12年間つとめたのは松崎氏が最も長く、人望が厚かったからにほかならない。

また、1998（平成10）年から2009年3月現在まで、チッソ水俣病患者連盟の委員長として活動してきた。前委員長であった川本輝夫氏とともに、「自分が救済されとって隣の人が救済されんはずがない」という信念のもと、未認定患者の認定申請の支援などをおこなっている。

それゆえ、1985（昭和59）年～1996（平成8）年まで戦前から戦後、現在に至るまでの漁業の変遷のみならず、沖集落の歴史や人々のくらしを知る数少ない人物である。



京泊漁港での松崎忠男氏
（2008年12月筆者撮影）

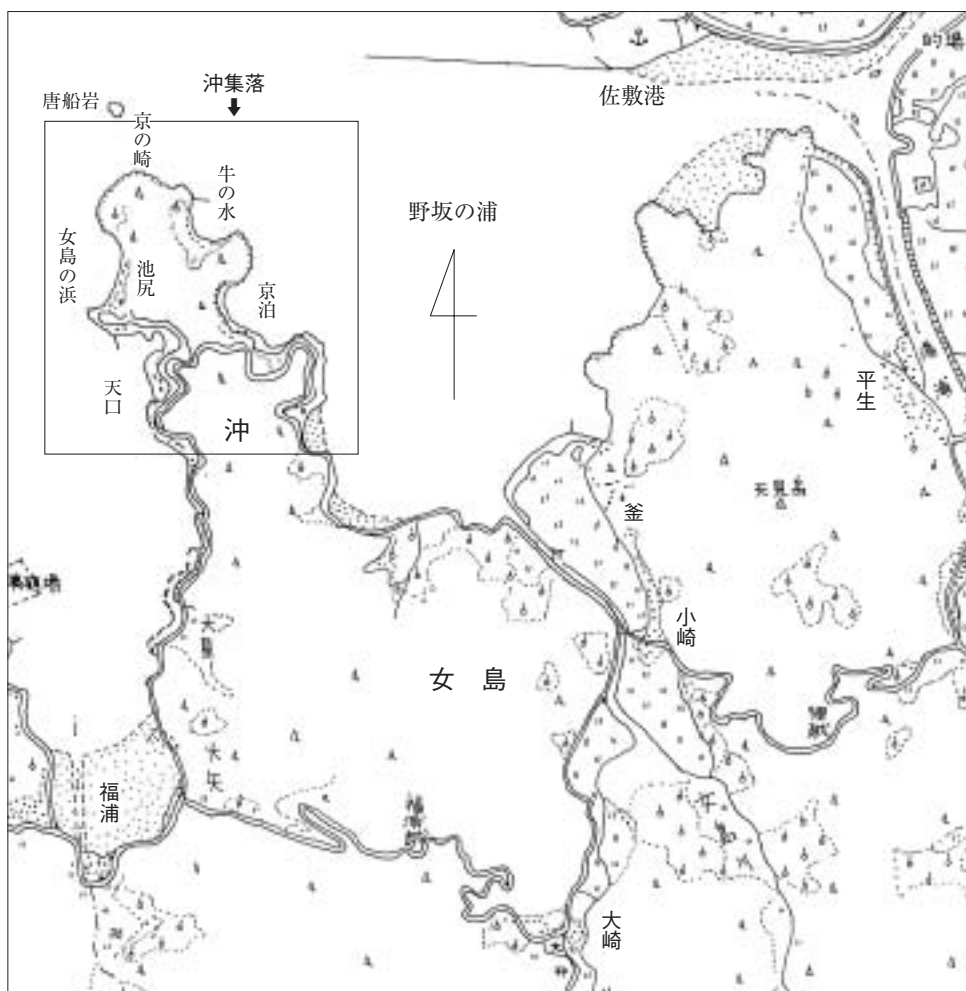
3. 女島沖集落

1) 位置

熊本県葦北郡芦北町大字女島の沖集落は水俣より北に約15kmの小さな半島に位置する。対岸には計石漁港（図1では佐敷港）がある。図1はほぼ女島の全域を示しているが、枠で囲んだ半島の部分が沖集落である（図1）。

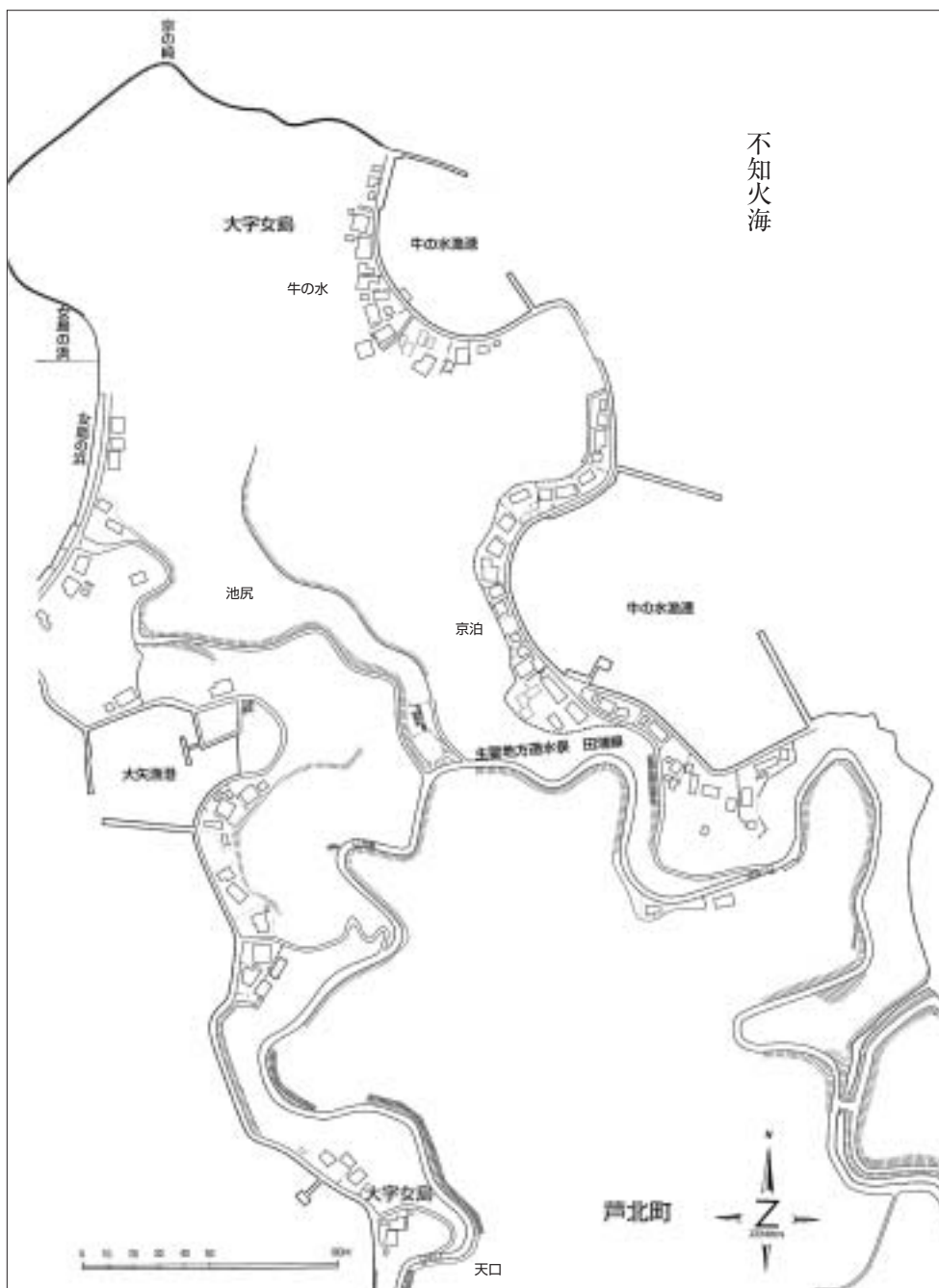
水俣病に関連して女島という地域名が語られていることが多いが、その場合の女島とはほとんどこの沖集落のことを指している。沖集落は、京泊、牛の水、池尻、天口の各集落をいう（図2）。

図1 女島沖集落の位置



（出典）1965年測量 国土地理院 1：25000をもとに作成

図2 沖集落の分布



(出典) 2005年3月発行 株式会社ゼンリン『芦北町』1:3000より作成

2) 「陸の孤島」であった女島

芦北町の集落の地形的な特徴は、急傾斜の山地に囲まれ分散している。これらの集落を結ぶ道は峠を越えて通じており、なかでも赤松太郎・佐敷太郎・津奈木太郎は三太郎峠と総称される峠道であり、国道3号線が通じるまでは最大の難所だった。また各集落を結ぶ間道は、山腹をぬうような難路が多い。

海岸部の道もリアス式海岸で出入りが多く、山が海岸まで迫っているために隣の村に行くのでさえ一山越して行かなくてはならなかった。たとえば、沖集落に車の往来が難しいほどの狭い県道ができたのが1963（昭和38）年で、岬の先まで車が出入りができるようになったのは1970（昭和45）～1971（昭和46）年頃であった。そのため車で移動も都市部、平野部に比べて遅れた。船で隣村まで往来するほうが簡便だった。とりわけ海岸部には孤立的な集落が多く、物資の流通や人の移動が困難であり、芦北地域の経済社会を規定する大きな要因になっていた。

3) 水俣病被害と地区の「集団的性格」

沖集落の世帯数は現在55、人口は約230前後、これは1959（昭和34）年当時からほとんど変化はないといわれている。沖集落での公害健康被害補償法上の水俣病認定患者数は、我々の知る限り121人にのぼる。70年代後半以降、認定基準が狭隘化され未認定のまま医療救済を受けている者も含めれば、有機水銀暴露を受けた世代（およそ50歳以上）のほとんどが水俣病という集落である。

女島地域の住民自体が「集団的性格」を有しているとして水俣病事件研究者あるいは支援者たちに意識されている。また、水俣病未認定患者の申請運動のなかで、「女島」という呼び名が、ある存在感をもって語られることが少なくない。その場合の「女島」とは実質的には沖集落を指しており、ここの人たちはまとまりがよく、皆が同じ方向で動くという意味で語られる。

沖集落では、被害者運動の中で岩本廣喜氏や緒方正人氏のような傑出したリーダーを出しており、本記録の松崎氏は水俣病患者連盟（認定患者の組織）の会長であり、未認定患者を組織し1995年の政治解決策時に大きな役割を果たした水俣病患者連合会長の佐々木清登氏もまたこの地区の出身である。また松崎氏のように水俣病に認定された患者たちが、未認定患者を応援し、上京したり、県庁に押しかけたりする行動をともにすることがしばしばあった。未申請の人のために医師を呼んで診察してもらう機会をつくるなどの行動をとっている。認定患者が申請者のためにこうした行動をとるということは、沖集落以外にはあまり例を聞かない。沖集落の住民たちのこういった行動力が「女島」の存在感を大きく印象づけることになった大きな要因の1つである。

そのことの持つ意味はさらに深く検討する必要があるが、女島地域住民の「集団的性格」を1つの大きな要因としてあげることには異論はないであろう。その根拠には、沖集落住民のほとんどが漁業を生業としているために、彼らの生活の基盤となった巾着網漁業と、それ

を中心に営まれた生活のあり様を見て取ることができる。漁業のあり方を理解せずには、沖集落の人々の生活、意識、ひいては被害というあり方はみえないと思われる。もちろん、生業をともにし、ひいては食生活を分かち合い、同じような暮らしを送る人々が同じように水俣病の被害を受けたのである。それにとどまらず、被害への対応や行動様式にもこの地区の生活の現実が深く関わっている。ひとことでいえば、沖集落における水俣病被害のあり方を決めているのは、沖集落の漁業、その形と盛衰だったのだということができないのではないだろうか。

4. 「統体制」とは何か

この聞き書では、「統体制」の崩壊がより具体的に語られている。そのため簡潔に「統」とは何か、女島における「統体制」の成り立ちについて説明を加えておく。

1) 「統」とは何か

漁業を支える各網元・網子の関係を「統」と呼ぶ。たとえば、沖集落には5統の網があったという言い方をする。この漁業組織のことを筆者は「統体制」と呼んだ。沖集落の住人たちの生活の基盤は、この「統体制」に依存していたのである。

1統あたりの網子の数は、船の大きさによって多少差はあるが30～40人前後である。沖集落の巾着網の場合、この「統体制」は網元の親戚が中心メンバーとして支えていた。従って、沖集落の場合、血縁的共同体と漁業共同体とが重なり合って成立していた。その中で、主要となる網子は10人程度であった。沖集落の住人たちは、すべての人々が何らかの形で漁業に携わり、男たちは網子をしていれば生活ができた。そのため生活の基盤は、この「統体制」に依存していたといっていよい。

戦後にはじまった巾着網は、地曳網と比べると人数や船の設備、漁における各人の役割などをみても遙かに規模が大きい。集魚灯でイワシの魚群を集め、2艘の網船でグルッと網をまわしてイワシを取り囲み、底の方から網を絞って群れ全体を一挙にとる漁法である。網が大きくなったため必然的に多くの人員を要し、「統体制」における網子の役割も多様化した。この巾着網時代に確固たるものになった網子たちの意識は、水俣病襲来時に「統体制」が崩壊してもなお漁民たちの意識の中にいき続けたのである。

2) 統体制の崩壊過程

沖集落において巾着網漁は、1949（昭和24）年から5統の網元が操業をはじめ、最も長く操業した網で1963（昭和38）年までであった。最後の方まで操業していた小崎弥三網（以下、小崎網という）は、阿久根沖に1955（昭和30）年頃から7～8年間出漁した。もともと不知火海で操業していくのが苦しくなったために鹿児島県の阿久根沖に出漁したのである（図3）。それが、阿久根に出漁し始めてからはイリコ製造による収入もなくなり、生活がさら

に厳しくなっていた。

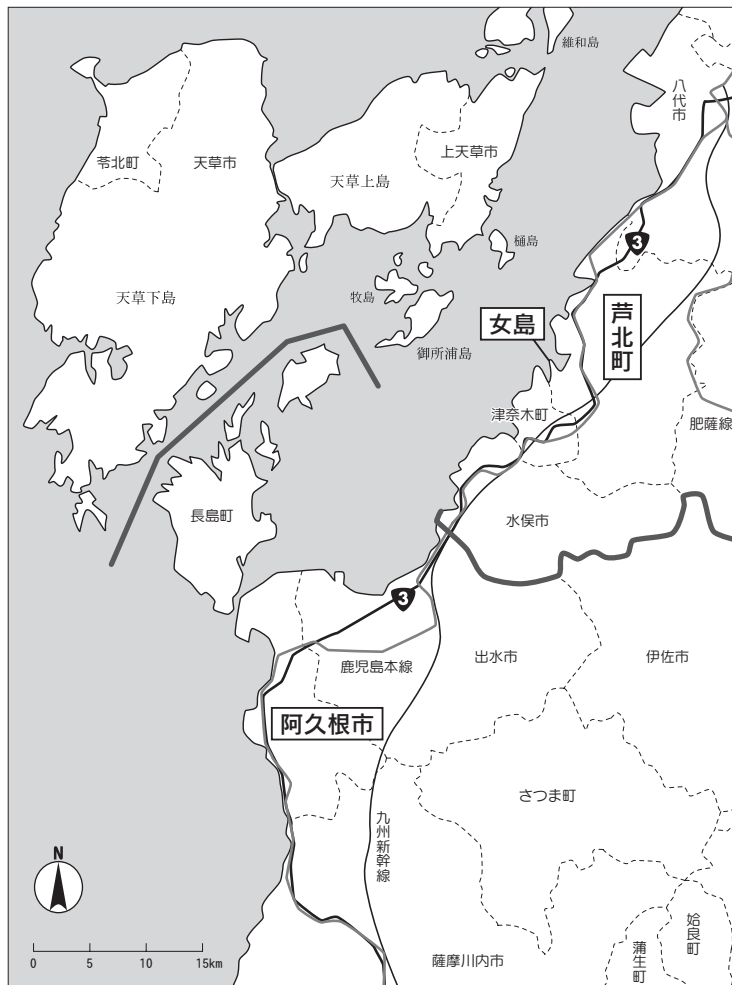
1962（昭和37）年、きびしい阿久根漁を続けてきた小崎網は阿久根沖から撤退する。

沖集落での漁を再開した小崎網であったが、巾着網時代の網子は去り、再び地曳網をはじめた。小崎網に残って地曳網を曳いたのは、巾着網を支え続けた中核部分の網子たちであった。9人前後の網子たちで、地曳網をひき、冬になると水俣湾でボラ囲い網を操業した。巾着網はやめたものの、統としての小崎網は存在していた。しかし、小崎網元が1965（昭和40）年に水俣病を発症するまでの3年の間に、網子たちは徐々に辞めていき最後に残ったのは5人となっていた。

巾着網が終わったあと残った網子たちは2つのタイプに分かれた。

1つは個人網で生計をたてるために統を抜けていくタイプである。小さな船を購入、または人から譲り受け、五智網、中取網、カシ網などの網をはじめると徐々に網子た

図3 不知火海の概観



ちは統を抜けていったのである。

2つ目のタイプは、共同の漁であるボラ囲い網をしながら統に残ったタイプである。最後まで小崎網に残ったのは、共同網を操業していた松崎忠男、小崎留太、小崎光男、長船庄太郎、岩本敏男の5人であった。彼らはなお5人の網子でも操業できるボラ囲い網を行いながら小崎網を支え続けていった。

しかし、網元であった小崎弥三は、1964（昭和39）年夏頃から足がもつれ、船に乗るにもうまく飛び移れなくなるなどの変調をきたしていた。その後、首にタオルを巻いておかなければならないほどよだれが出るようになり日々病状が悪化していき、翌1965（昭和40）年には網元をやめざるをえなくなった。したがって、最後まで残っていた5人の網子たちも自分たちで個人漁をはじめざるをえなくなり、この年小崎網は消滅したのである。

5. 本記録の特徴

「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」は本人の「語り」をできる限り忠実に再現した。編集にあたっては、対話形式を改め本人の語りとしたほか、重複を避け、時系列的に配置換えしたことをのぞいては、語り口や方言も含め、松崎氏本人の語りを忠実に再現してある。本記録と同様、漁民のヒアリングをととして研究した文献や資料には主だったものとして下記のものがあり、非常に教えられることが多かった。

- 1) 久場五九郎「天草漁民聞き書」岡本達明編『近代民衆の記録7 漁民』新人物往来社、1978年、pp.35～259

1974～1975年にかけて天草の御所浦島、下島牛深、上島宮田村の漁民を対象に聞き取りがまとめられている。時代区分は、明治末期から大正時代までとし、天草の漁民とは何か、水俣にとっての天草とは何だったのかを、「百姓と舟人」「漁業の盛衰」などの項目にそって漁民たちの様々な語りを編集した記録である。

今となっては聞くことの出来ない明治末期から大正期における天草の漁業を支えた漁民の語りがそのままの形で残されており貴重である。

明治末期から大正期を生きた天草の漁民の語りがそのままの形で残されている点において「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」と共通している。

- 2) 最首悟「不知火海漁業の移り変わり－芦北郡女島の巾着網漁について」色川大吉編『水俣の啓示』（上）筑摩書房、1983年、pp.241～321

女島沖集落の網元である井川太二氏の記録と、ヒアリングをもとにして不知火海および沖集落における巾着網漁の変遷を、時系列的に追いかけたものである。

- 3) 色川大吉「不知火海漁民暴動（1）」『東京経大学会誌』東京経済大学、第116・117合併

号、1980年9月

不知火海漁民暴動の経過をたどるなかで、各漁協組織内の組織過程の内容、リーダーたちの個性を具体的に記述した地域民衆史の試みである。当事者への直接取材の記録という点で貴重である。

2)と3)の先行研究は、ヒアリング記録に分析を加えたものである。当然そこには筆者の解釈が加えられており、語りがそのままの形で再録されているわけではない。

4) 水俣現地研究会「津奈木町の漁業と水俣病」『現地研レポート漁業』1988年（未公刊）

1988～1989年にかけて、田浦、津奈木、芦北町女島、水俣市八幡、御所浦などの各漁村で漁民に聞き取りを行ってまとめた記録であり、水俣病研究会に所蔵されている資料である。女島の場合、「女島からみた漁場としての水俣湾、および緒方網元の漁業の歴史と水俣病」と題されている。

設定された研究テーマに沿う形でヒアリングを行い、誰がどのような語りをしたのかを記録するという点で「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」と同様と思われる。

5) 岩本廣喜『歩み』私家版、1971年頃と推定

1974年に結成された水俣病認定申請患者協議会の初代会長をつとめた岩本廣喜氏が書き残した冊子である。女島沖集落在住の岩本氏自ら沖集落の家々を訪ねて、各家の来歴について詳しく聞き取り、岩本氏自身の記憶をあわせて、沖集落の歴史および漁業の変遷をまとめた記録である。戦前期、沖集落に移り住んできた第1世代、第2世代の人たちからの聞き取りをもとにしており、今は故人となった人々の記憶としても貴重である。

この資料は、岩本氏自身によって書き残され、事実在即すよう書かれた手記であり、漁民の「語り」を再録したものではないため、本資料と同様ではない。

「芦北漁民 松崎忠男：女島聞き書」は、松崎氏の人生の経過にそう形で、女島沖集落における漁業の変遷、特に「統体制」の高揚期から衰退期までを中心に、氏の語りをそのままの形で編集されたものであるため貴重であると考ええる。

筆者が理解している限り、不知火海に生きる一漁民の「語り」の意味は、漁業をとおして体得してきた漁業の盛衰、「統体制」を支えた網子の意識、その地域における家族の意識、地域の特性、水俣病来襲時の住民の意識などに対して漁民がもつ見解、思想、解釈を1つの「物語」として聞き手に伝えるものである。

この語りを記録に残すことは、戦後の沖集落における巾着網を支えた漁民たちの息吹きを語り継ぐことでもあるだろう。

不知火海の漁業

表 1 不知火海の漁法

漁法名	漁 法	船の数・乗組員数	総人員	漁 期	魚 種
地引網類 地引網	<p>小高い丘の上や木の上から魚の群れ（あかみ）を見つけ、陸で待機する人たちに知らせ、網舟が魚群を取り囲み、曳網を延ばして船を岸に付け、その網を陸から引き揚げてとる。1日に何回も網を入れることもあれば、イワシがいないときは1回も入れないときもある。11月頃は夜獲れる。</p> <p>網子には1網毎に取れ高によってイワシを分ける。それを自宅で湯がき乾燥（むしろ）させイリコを商人に売る。地曳網用の網を海上でひきまわす漁法のことを「沖繰り網（チュウドリアミ）」という。</p>	<p>5隻 網船：2隻 2～3名 脇船：2隻 2～3名 手船：1隻 2名 ※各船団の漁網・船舶規模により乗組員数・櫓数などに若干の相違がある。</p>	<p>乗組員：8～10 網子：20～30 乗組員一同上陸して曳網を引く。 なお、乗組員以外の男女、老幼も協力するから曳子の数は一定しない。</p>	3～5月、11～12月	白子（カタクチイワシの稚魚）
まき網類 縫切網 （八田網）	<p>通称「八田網」。海に大風呂敷を広げるように網を広げ、8カ所の曳き手で引き上げることからそう呼ばれていた。縫切網は八田網が進歩したものといわれる。巾着網が導入される前までは、盛んに行われていた。漁法は、夕刻出港し、火船が集魚灯で魚群を集結させ網に誘導する。両網船は舳をとき、口船に曳網を渡し左右に分かれて施網にかかる。網は次第に引き上げられて小さくなり魚群は次第に捕獲部に集まる。</p>	<p>網船：2艘 8～10名 口船：2艘 3～4名 火船：2艘 2～4名 曳船：1艘 動力6馬力 ※網船は網を積み、口船は漁獲物を載せる。曳船が各船を漁場まで曳航する。</p>	14～19名	周年 集魚灯の効果がかかる月夜は休漁。	カタクチイワシ タチウオ スズキ
まき網類 巾着網	<p>巾着網には2通りの漁法がある。また操業には、日中型と夜間型がある。魚群発見の方法が違うだけである。</p> <p>①片手巾着網 天草郡牛深や御所浦が主根拠地。東シナ海で、マイワシ、アジ、サバを主目的とする。</p>	<p>①片手巾着 本船（網船）：1隻 24～28名 母船：1隻10名 火船：2隻5名 ×2</p>	28～40名	周年 集魚灯の効果がかかる月夜は休漁。	カタクチイワシ

まき網類 巾着網	<p>②双手巾着網</p> <p>御所浦、芦北方面が主根拠地。カタクチイワシを主目的とする。2艘の網船がもやいを解いて、口船の力を借りて左右に分かれ双方から魚群を取り囲み底をしぼって魚群を丸ごと獲る方法。網を引き揚げるのは、人力または「カグラサン」（巻き取り用ロクロ）を使用する。</p>	<p>②双手巾着網</p> <p>網船：2隻 17名×2 無動力と動力がある。動力は焼き玉2馬力。 火船：2隻 3～5名 ヤンマーディーゼル4～5馬力。口船：2隻 5～6名</p>			
船曳網類 手繰網	<p>「島手グリ」とも呼ばれる。地曳網が進化した漁法。一般に手繰網というのは人力で曳網するものを指す。船を流しながら曳くものは、潮打瀬、流し手繰等と称される。</p> <p>沖の方に身網（魚だまりの袋）をつけて1～2隻の船で沖の方から網を入れて、海岸につけて錨で船を固定して網を曳く漁法。網を曳く場所は、岩場と岩場の間の海底。期間の短い他の仕事の暇をみて操業していた。</p>	<p>1～2隻 1～2トン</p>	2～4名	5～7月	エビ及び雑漁
船曳網類 五智網 （トントコ網）	<p>地方名で「トントコ網」とも称する。早朝出港する。漁法は、1隻の舟で岩場の多い場所で一方に「オドシ」と呼ばれる浮きをつけ、網の先に10尋（15m）位の網をつけ、網には「ブイ」というわらを曲げたものを2尋おきくらいにつけたのを、ここと思われる漁場をぐるりと廻してきて最初に入れた浮きをとり、底帆（そこぼ）＝錨を入れて潮の抵抗で徐々に舟が身網のほうに動いていくようにして、網を引きながら舟べりをトントコ叩いて魚を網の中に追い込む漁法。この網の特徴は、船を停止しないで曳網する点にある。</p>	<p>1隻 30～35尺 着火5～6馬力 ※動力船を使用する場合、漁場の往復と網を打廻す時のみに動力を使用する。</p>	1～2名	周年 主漁期は春秋2期である。 4～6月 9～10月	タイ：3～7月中旬 エビ：6～8月 アジ：6～7月 イカ：9～10月 タチウオ：12～4月 トラフグ：4～6月初

船曳網類 打瀬網	<p>2通りの漁法がある。</p> <p>①帆打瀬網 風力と潮流を舷側にうけ船を横に流しながら曳網する。別名を「流れ網」「横流れ」という。熊本県の帆打瀬網は「備前打瀬」といわれる特殊な方式。不知火海では芦北の佐敷町が主根拠地。昼間と夜間操業があるが夜間操業が主である。</p> <p>②潮打瀬網 底帆を用いて潮流を利用する。イカを目的とするため「イカ打瀬」ともいう。天草郡上村方面が主根拠地。</p>	<p>①帆打瀬網 1隻 3～5名</p> <p>②潮打瀬網 1～2隻 各2～3名 ※漁場の往復には動力を利用するが操業中は利用しない。</p>	<p>①帆打瀬網 3～5名</p> <p>②潮打瀬網 2～6名</p>	周年	<p>6月12日～8月：イシエビ、子エビ 9月11日～11月：クマエビ 12～4月頃まで：アカシタビラメ、ホシカレイ、カレイ、コチ、ヒラメ、クルマエビ、イカ</p>
その他の網類 打網	<p>主に冬場の漁。網を打つ人が船頭で、舟を漕ぐ人（トモデシ）は網を打つ人の指示で舟を安定させないと、打ち手が網を投げ入れた際に網と一緒に海に落ちることがよくあった。</p> <p>浮子がなく、沈子だけが付いた手網を円形に投下し、網裾を内側に吊って袋をつくり捕獲する漁法。網打ちで左腕が濡れるため、舟には「火どこ」という小さなかまど型をしたものを積んでいた。</p> <p>また、仕事の合間、潮の流れが速いときに休む（潮かがり）時は、船団がもやっていた。</p> <p>舟で寝るため、トマガヤや寝具などを積んでいた。昭和10年頃まで操業されていた。これに代わってカシ網が流行する。地曳網の合間の漁。</p>	<p>1隻2名 地域によっては、船団を組んで漁を行っていた。多いときは20隻以上あった。</p>	2名	周年 最盛期は旧暦の11月～2月	ボラ エビナ（ボラの子） シメ等

延縄類 延縄	「ナエナワ」「ノベナワ」とも呼ばれる漁法。俗に「鉢」と呼ばれる桶に100本くらいの針をつける。4、5桶を海に投げ入れ2～3時間してから元のほうから揚げる漁法。シャクを餌に使う。魚種によって鉢の構成が若干異なる。手漕ぎ船であった頃は簡単な生活道具を船に乗せていた。場合によっては1カ月帰らない時もあった。	1 隻	2～3名	周年 最盛期は 秋から冬	タイ チヌ ハモ ガラカブ
刺縄類 磯立(立) 網 (磯刺網)	地方名で「カシ網」とも称される。夕刻、潮だるみ（潮の流れがとまったとき）をみて出漁し瀬に網を張り、翌朝同じく潮だるみを利用して揚網する。この網の特徴は、漁場が瀬の所に限られていることである。網は細長い带状で、沈子部は水底に達する底刺網で絹網または三重網になっているため漁獲量が高い。現在でも行われる漁。	1 隻 18尺程度	2～3名	秋～春 盛漁は冬	チヌ タイ メバル カレイ

注) 表中の「船曳網類」という表記は、手繰網、打瀬網、五智網、イワシ船曳網などを総称して「船曳網」というため、『熊本県の海面漁業』の表記通りに表記したものである。

(出典) 農林省熊本統計調査事務所『熊本県の海面漁業』1954年
御所浦町『御所浦町誌』2005年
岩本廣喜『歩み』1971年（推定）

表1の漁を、いつ、どのくらいの期間、何を狙って、どんな漁具で行うのかという点に絞ってまとめ直すと次の表のようになる。

表2 不知火海における漁具別漁期別主要漁獲物

漁 具	網 名	許可及び 免許権数	許可漁期 (月)	主漁期 (月)	主 要 漁 獲 物
まき網	双手巾着網	14	1～12	2～10	カタクチイワシ、タチ、マアジ、サバ類
	縫切網		5～7		カタクチ、キビナゴ、マアジ、タチ
	大網	2	12～4		ボラ
小型機船 底引網	打瀬第2種	80	1～12	4～12	クルマエビ、クマエビ、シラサ、ハモ、イカ
	打瀬第3種	89	1～12	4～12	同上
流刺網	エビ流	315	4～12		クルマエビ、クマエビ、シラサ
	コノシロ流	57	1～12	6～11	コノシロ、タイ、マアジ、タチ、ヒラ
	マナガタ流	2	1～5 10～12	2～5	マナガツオ、コノシロ、サワラ、ヒラ
	タイ流	10	3～9	3～6	タイ類
	サワラ流	38			サワラ
	ヒラ流	16			ヒラ、コノシロ
地引網			1～12	3～10	カタクチ、コノシロ、キビナゴ
磯刺網			1～12	3～10	イサキ、メジナ、メバル、タイ類
一本釣			1～12		タチ、コチ、カレイ、イカ、スズキ、タイ類
ボラ餌付			1～12	9～10	ボラ
はえなわ			1～12		タチ、ハモ、タイ類、カレイ、スズキ
イワシ船曳網			1～12	3～10	カタクチ、タチ、コチ
桁網			1～12		アイゴ、コノシロ

アジ流		1～12		マアジ、ヒラ、マナガツオ、コノシロ
吾智網	10	1～12	2～5、 7～11	マダイ、チダイ
手繰網	8	1～12	4～11	チダイ、エソ、エビ類、カレイ類
も手繰網	19	1～12		同上
刺網	19			ウシノシタ類
タコつば	10	3～10	5～8	タコ
イカかご	14	12～5	1～5	コウイカ、シリヤケイカ
ゲンシキ網	27			
囲刺網	84	8～12		ボラ、コノシロ
共同漁業	第1種	2		アオノリ
	第3種	29		つきいそ
	その他	13		
区画漁業	オゴノリ養殖	2		
	ノリヒビ建	38		
	カキ	8		
	クルマエビ	8		
	カニ	2		
	貝類	23		モガイ、ハマグリ、アサリ、オオノガイ
その他				竹羽瀬、アンコウ類、その他

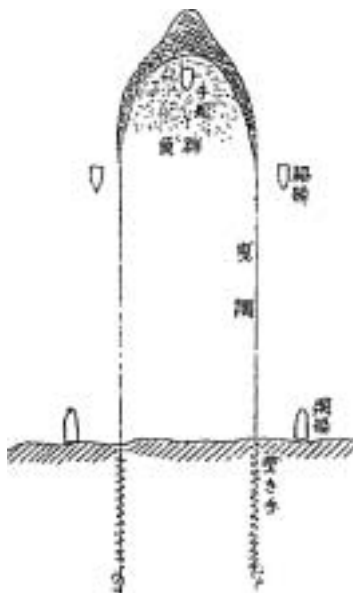
注) 許可及び免許件数は1961年1月1日現在、熊本県分のみの数。

(出典) 西海区水産研究所『水俣病における水産の調査研究』1961年

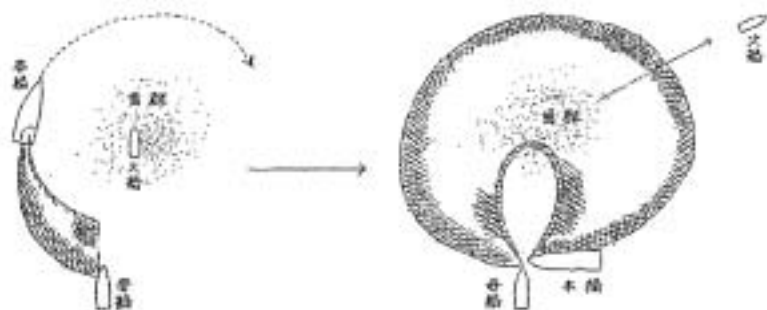
不知火海漁業図

漁業の説明だけではイメージが付きにくいため本稿で取りあげた漁業を図示した。

地曳き網

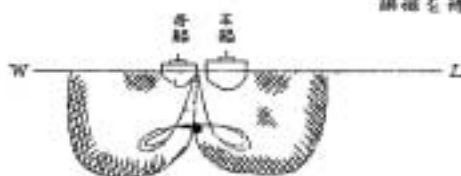


片手巾着網

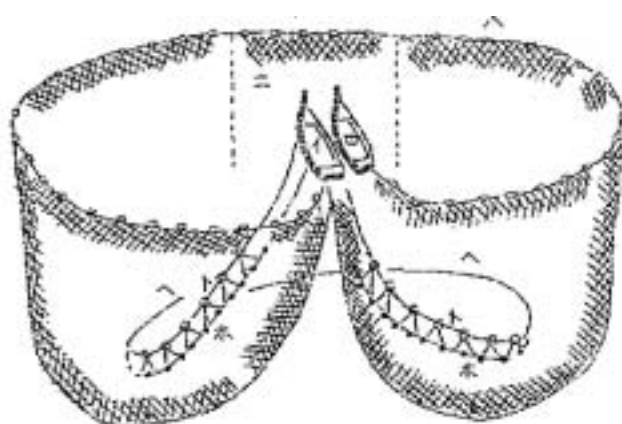
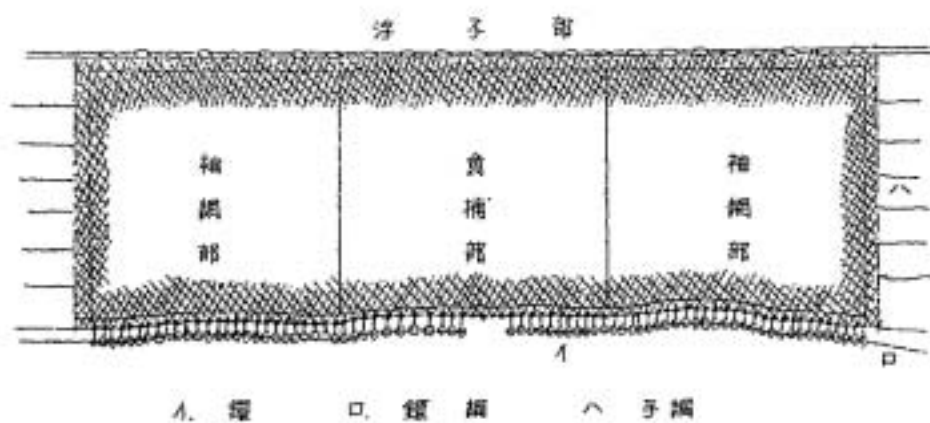


網の一端を母船に渡し本船は全速力で
石碇を使用して放網にかかる。

本船が魚群を越えて母船
と接触するに至れば直ちに
網を締めくる。

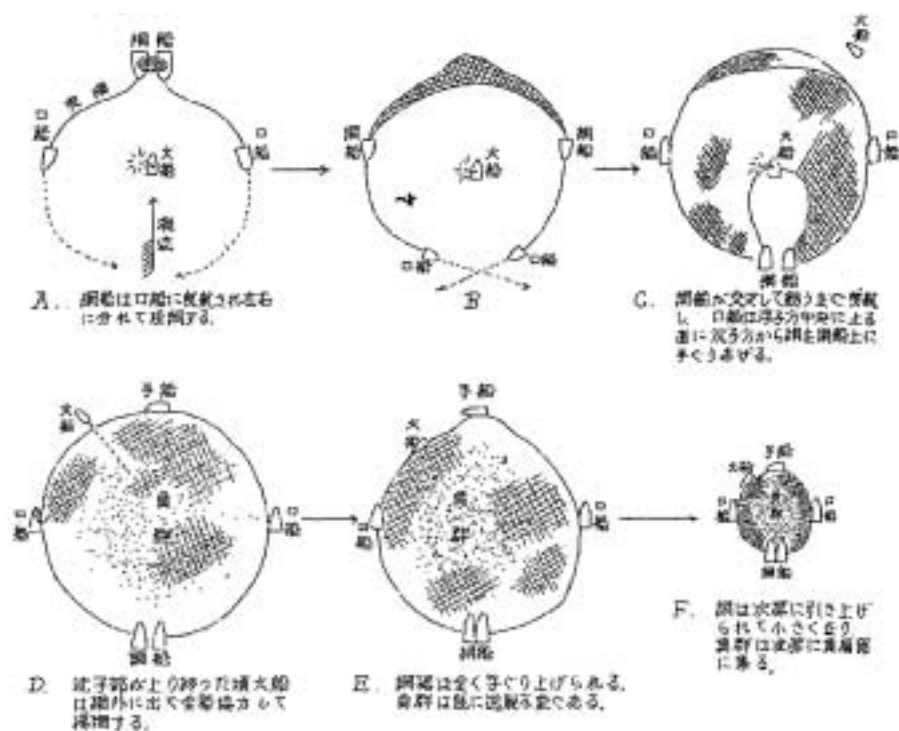


双手巾着網

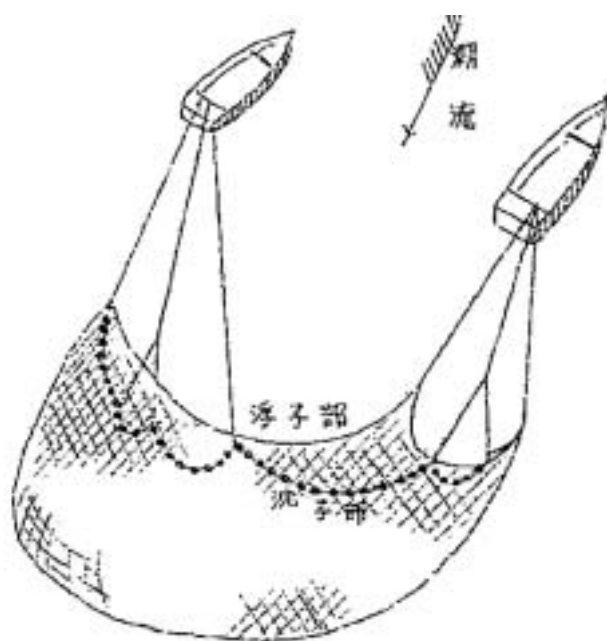


- A. ま網筋
- 口 さか網筋
- へ 浮子及浮子網
- 二 魚桶部
- ホ 沈子及沈子網
- へ 小き出し部
- ト 網筋（網筋）

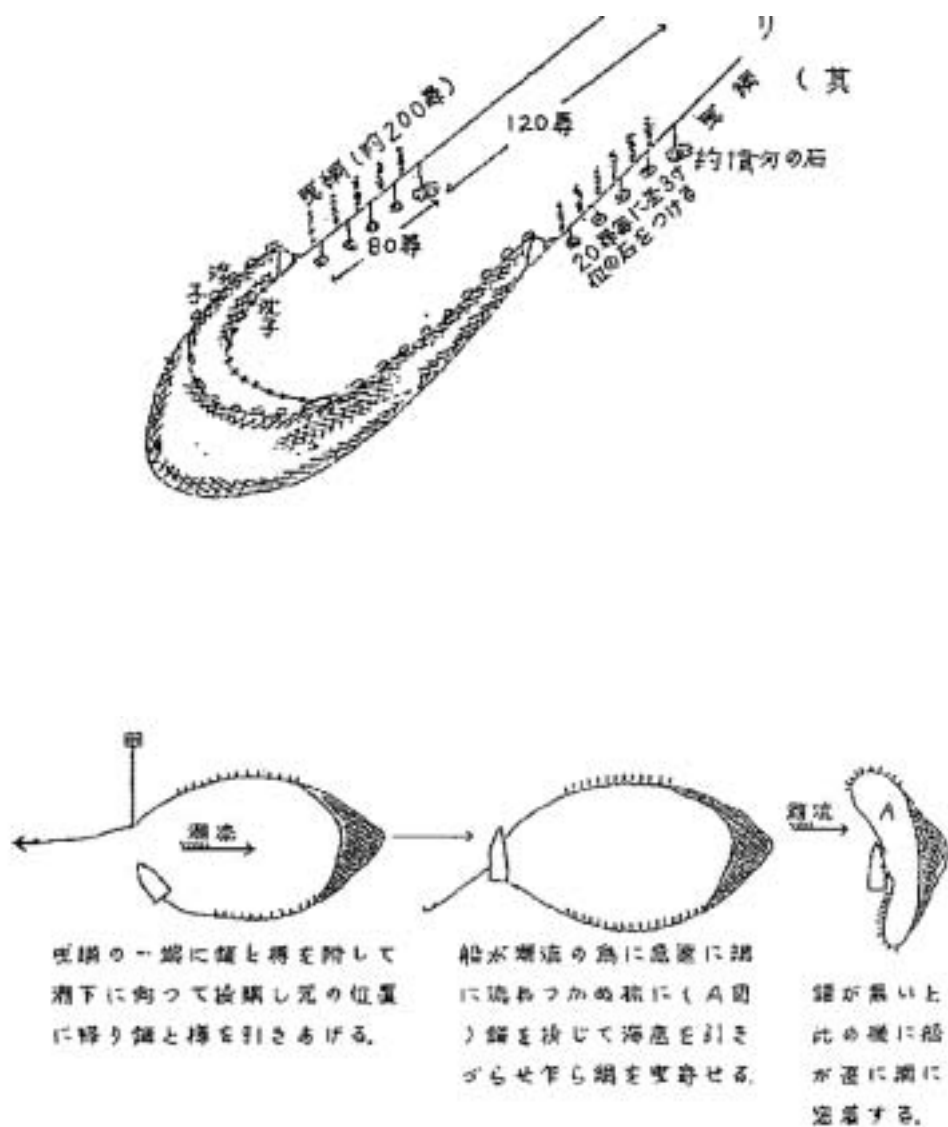
縫切網



八田網



五智網



（出典）農林省熊本統計調査事務所『熊本縣の海面漁業』1954年、p59、p62、p65、p67、pp.109～110